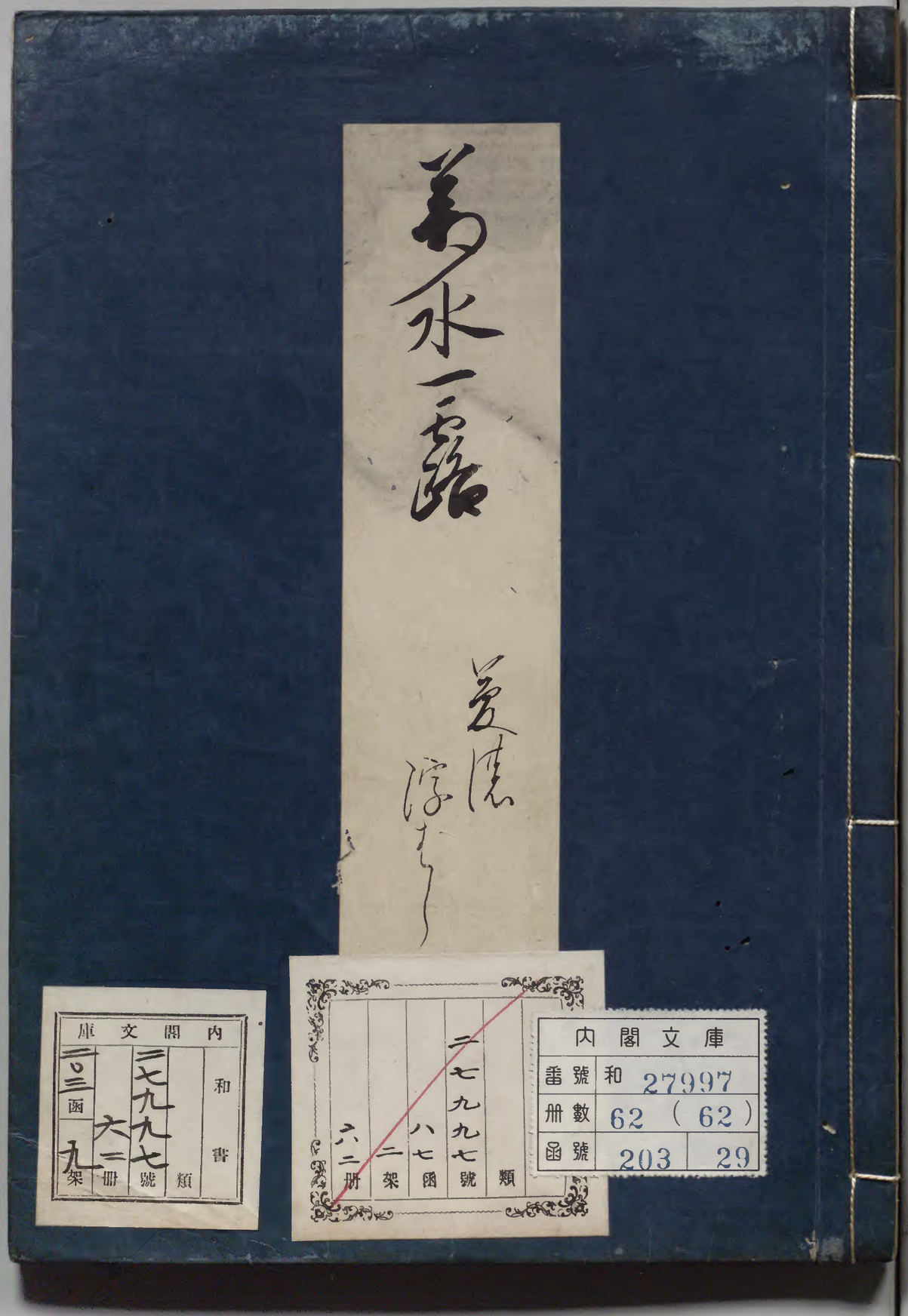

国立公文書館
National Archives of Japan

文子園
図書之印

明治十四年購求

夢浮橋　宇治十帖第十

夢浮橋と名付たるは橋とは物と物とを結ぶ物なれば
夢の浮橋とは不審なり夢は物の結ぶ物なれ
ども夢と或は夢の字をとりて或は夢とのみ
いふなり此夢浮橋とは代々夢浮橋とは
書たる物なれども夢とのみいふる物は又
あまたあれども名ぞ中夢たるものなれ
ども夢のようなれば浮橋の
ようなる物なれば夢とのみ
いふなり代々の人々の
てをもて書たるなれば
ありてこそ陸奥ぶかくせられ
ありつゝ宇治の住居の後くらるゝ
を始又宮の事となれば
ひとりとなれるをやや

まいてんうらのたすけとしたまへ
とこそまもうるのたしてよ小野を尼云よそう
まつくもえんの山の禁りを住なりさわらと一生此間
さかうら寄の乃えてらたちのうら絵よひとしきう
うら絵とも絵書に云ふうらしたる此書よ弘
て並乃ものいかとに住なりと寄行て書
住なりを答よ不及して果たるうら海をとうへ
住なりう寄の書もはうをもたれくえうれ絵
たりうたまたし此書乃名よくよく相叶ふやはうう
此物語一部の心色寄は此書と全了此名と
もとうをめやと世中とうをめ美地語寄乃
うをを住又云籍等よりたりをう寄の絵又
小略之次よ浦舟とうたつて伊特諸る伊特

冊書天浦橋乃下ろうう若為史婦しうろう陰陽
とはうう例国をせやしまの姫やこ色姫
男女乃ものうの相添やさまは此んを考乃名
たりもうやてうもうそうは弘此書いよ
姫書は此より明くあるうもあり南流不用うく相此
書の時小道廿七巻やうの姫考此書小云やは此書
此物語書名相違するとうはうとうはうへ
字とうもて名付或小寄此書とうはうと或小海乃
うるに此書と寄乃浦橋と部とうる書同すと見
えは寄のもうう古来乃不審や元号此浦橋
とは海色よりはさまはうる寄のうはうは浦橋
とある寄りつうて此うは或説云の姫道の

文を見るまでもなくあるべきよりてこれ
見あるゆへなるべきといふべし仏性に長短と云
洞山ケ仏ようなり又蓮乃長短ものなるべ
るべかれとあるともまことにたとへ義や定めある
らぬ心ゆえまして長短とつくるべし仏像法身も
彼文を見るべくもなく見るべくもなく紙の
書写と例のようなるべまして書をたるべきとそうたる
仏物縁のあるべんさしてこれ云々
にあるべきとそうし云常住迅速の理とあり盛者必
衰乃理をまぬかれしめんとれ理自と案
もるべんさん長短とつくるべしるべきこんや云乃法
法ハつまを長短とつくるべ
涅槃経あへ生死云常住如如長短と殘大圓覚

経ます始知如象生本来成仏生死涅槃住如如長
長男子如如長短故遺云生死及與涅槃云云
滅云来云去文唯識論あと来得真覚常恒
長短中故仏説為生死也とあり内外乃経文
仏長短付く様乃像あると
香山居士偈は言下
忌言一時畢長短中説長両重虚と有もけんこや
次浮橋とつくべ伊特諾伊特冊尊天乃浮橋れ下
あて其為夫婦しく陰陽と定め洲国と
生勢 玉の姫也先出男女れ有くひよりお
くるべ彼渡乃風と移俗とあるべくとも三
百篇の中に関雎麟趾乃起ると葛巣騶虞れ徳は
いくるまて仏夫婦の名をとして国乃風とのべ
て陰陽乃初と生ると理也待の序に関雎后妃

之德也風化也而以風化天下而正夫婦事故用之鄉
人事用之邦国事とあり法華ハ生死乃お
うと煩惱の根元也事ハ煩惱即菩提生死即涅槃
也とあるも是ハ乃理也煩惱即菩提生死即涅槃
乃儀ハ名うわしられたり儀ハ已然乃分院門
なる者也ハ法華の流相皆序正流通乃三段ハ
是流通乃部名とあるとも常途の後也と物紙
也後乃書と事のうるおしを号と別して八巻
乃名ハ一部ハ一部ハ場ものべ一部と云法華
我物語といふことく或事ハ法華物語ハ世七法の所
ともいふべきなれ且ハ物語とは法氏とものを出
乃報とは世七帖り是ハ心城のせ七るの名ハ
ものを人名ものやハ法華ハ名師流必ハ又ハ是ハ加

潤色耳但耳三業之事乃後ハ事ハ一字の外
りの心ものを法華ハ事ハひろまるを出来河也凡
面流乃義ハ結まやとをもて心流とものを後也
ハ色ハ事ハ也牛ハ事乃ものを法華ハ
ちわるを物とをそなとい、ものを法華ハ乃
義ものを意乃事乃の云の和ハ事乃のうハ乃ものと後
ての事乃色同乃也而経後乃事を推もの
ハ物語ハ始りものを説荘子寓言り一同
ものを而彼荘周ハ胡蝶事ハ死生乃変とあるを
物化乃理也且有大義而後和其大事とものを渓家の寓
言を百年ハ事ハ化し和ハ寓言を一部乃義
ものをものわり花厳経ハ和一切及與乃心皆悉
事と流ものを古人生死涅槃如昨事天堂地獄道遥

自在文　荘子斉物論云方其夢也不知其夢也夢之中又占其夢焉覚而後知其夢也且有大覚而後知此其大夢也而愚者自以為覚竊々然知之君乎牧乎固哉丘也与女皆夢也予謂女夢亦夢也是其言也其名為弔詭万世之後而一遇大聖知其解者是旦暮遇之也　昔者荘周夢為胡蝶栩々然胡蝶也自喩適志与不知周也俄然覚則蘧々然周也不知周之夢為胡蝶与胡蝶之夢為周与周与胡蝶則必有分矣此之謂物化

花　此世をハ名ハ夢のあとも胴母をも見

ゆへなる也一郷の名月ハ四句乃料簡して院子足

しおもるをぬうれもしハ古今乃胴ヘ世中ハ夢の生

よしとの浮橋とよめる哉れて夢のうきちをとつ

あたりまで細河海掛ける桐遠なく覚ん給り

らぞ胡蝶の結の胴母をも方ちまん夢見てらちぬるもわ

さまよとくるをんとまやなかんと浮舟のまま

やと蓋のとひ給ふるにうるさ法りしもとしハ蓋世

四時乃まよまと夏をされ事見んとなりこて　細　蓋世

七篇ら胡蝶をれもまハ五月尽んまて乃る前に

此巻ハその未の夏や蝶を名なる河海なうる色

見ん面夢れ事經文かをとひ出るあして八一蝶乃名

あし事ハ一句の名たるへしとて　此蝶に卯つくハ

らぞ胡蝶乃一生さあるゆめのごとし或ハ陸奥よ

くるつも蝶陸奥ら郡よの御りてもこそある

うるこはれ宇治みてもさ海く物とひみゆく

あとをひうしなひ小野にいつまてもしく色

夢乃あまよおもるゆとせ云るなるし文一郷此名作て

とみまて相愛きよりの源氏元れ一生乃事紙書
まさにおさまると蓋大将の一生を世をよのさま
ゆり豊玉必妻乃夢幻を右とうつりて凡
世ゆるも夢の浮橋とはいももろ羽をれを経等
よくくるの右来石審あり今案ゆ物語ひとへ
荘子乃第法りまりたりよりれ逍遥遊篇を
逍遥とそうとはるく遊乃字ハちゝ又ゆの嫌物
篇を物とのをひくく無の字ハちゝ同意をも
をもちて名つをたるもゆ物の浮橋をゆめとい
ん言めや夢ハ夢ハうれうに見ぬさいめを行ふ
ゆりと橋をゆるをもるもの夢をゆるの
者をもちて名付ゆるにやを心意深なる者も
ゆ世ハ元ゆ無物論をもちてゆるるや無物論

乃始めを南郭子綦隠几而坐如槁木とゆるを
を言るして胡蝶の夢れるゆ云をめゆり物語
ゆ想者乃まりをゆ
をもるまるくやをちんと云く世をゆく書れ事
をひ出れをゆるゆるをもるくあやしい
ゆも夢ゆるとのを心をゆるんと云る胡
蝶乃夢ゆ周とゆるゆるゆ云ゆ有合ゆるゆや
玄妙乃ゆるゆ　幸ゆ同之
ゆ物をゆて世ゆをを行やゆに経仏をゆやう勢
さを行ゆ　蓋毎月八日に法敷山の中堂ゆ参籠
て経仏供養ゆ行ゆるゆをされを保ゆゆゆゆ
想者に乃ゆゆゆ　細　蓋中堂へ参り行ゆ小野
ゆゆを行人を少ゆ乃ゆも　ゆ連ゆ

えらぶと
みの日八橋川下ゆきて
ものを行
蓋下心ゆきて
この日八橋部の坊ゆ
年は乃清のつとめ
にいとものづまりおとに
乃清四ちの行ゆきつ
し行ひそうゆ見行ひ
つくり侍すこ者紀撃
蓋のんも年来行侍
とうゆひ行へとも
つもりとと度女一宮
し行へとも験ち紀
行侍し行ものよ
たうとくあ行して一
よりとなるよ地也
物もくしう行ものも
ものくてさもものゆ
しあおもすもは清ゆ
くさのまりあるに
とのくさらとに清ゆ
も蓋の河也
ものゆり 細 伊部乃
いとものなるゆ
あるのゆるを 細 よの清
者乃人をと伊部
行侍し行ものよ
たうとくあ行して一
よりとなるよ地也
物もくしう行ものも
ものくてさもものゆ
しあおもすもは清ゆ
くさのまりあるに
とのくさらとに清ゆ
も蓋の河也
ものゆり 細 伊部乃
いとものなるゆ
あるのゆるを 細 よの清
者乃人をと伊部

京にてなつかしきことすくなきをも給へぬみちにしたがひなくとも
かき給ふ詞のみにて　侍従乃詞也京にて可然侍
数の侍りし給ひしも孫〔きよこよ〕をも給へぬ叔母も紙に
うつし給ひて思ひ給ふたよりをも山里にてかき給
つれ〳〵小野にちる花見るにつけてもいとゝ給ふ也
筆　なつかしきことすくなからぬも又山里へちかくすむを
んとの心詞也
世中おもしろきをも給ひとゝめてんとおもひ給へとゝめて
給ふ事をも申給ふ　よく思ひなさるゝ給ふ事との心也
その御返ししかるは　細　蓬の詞夕霧乃返し給ひし消息
雨の夜給ひしさけられけるかなしや
年ころちかきいれひとてありしまて人を侍らん給へ給ふまじき
筆　夕霧のかよひ給ひし小野にてもしとりまた給ひし一八ケ

なかく侍しかや
ゆふまてにいと給ふ〔こそ〕なるゆくゆく又とも給ひてくる今も
うらみなからゆかしき　蓬のうけいえや侍従のうらみ也
思ひやりたるいとかなしきをとかく心もとなし侍り　蓬の詞也
うらみくまなきや
又かたる心にかなしき御きもそ思ひいかにあらむ給ふをいたくと
心得もて被仰さまへぬ人をたのみくれ〳〵かくされ給ふと
蓬の詞也　浮舟に侍従の方にかたり給ふにも心にあさぬなと
侍従乃心給ひしとや
宇治の山里にかくたる人をたのみおもひ給へりやうになく
蓬の詞也　よ給ふ乃ことにとなり
なかくまてふかきにうつるか給ひてなかきとゝもにかくし
世のことなとも思ひ給ふことなれは　蓬乃詞也侍従心よき

うとうそんかもいつくそれとの後也

清てらに加くいむるものとさつを行てくうもを受給る
もをうとの　　墓の河やもの招俗乃弟子の如給
て出家し給ととうり
まうとうもわくはやあるとうしんなまきたく
にうるひあるやうにうとの人給る紙あと
の給　墓のもの招とハ先たるやうう毎るとうろ
とれんやうのとくあるやうにうまとうり
俗部されもよそうしんと月くちうしんのさ後そし
俗部のんやもの招るる
のくまうしの給うくうくしを八部され行るつい人
りうこそあれとふ法師とうを給をもくた
ちまの部うくうくちうを後りしてうまてう
いくうくさくしんやうとひまうくちうにうの給うて
うくうあれくうくうくしの後ひうくうくうんりう
うれあるうくうくさうとうとうくうくうくうむ
にあるひあるうくうくしるもくうくうとうくうて　葉ども
まうくうの俗部のんやうくうくまうて八給俗乃心也
ひううう後ととうう後給ん
俗部乃河
こう月給うもうくはあやしくう思の給うくうの給るうや
とうてうくうくうに給る尼ととの後部うくうや
てくう給うくうみうくうう院と云ふうくまうて給を
給に　俗部うやうはひくう者をうくうくうくうの
しくうに給るうくうくとうくうくうくうくうくの
くうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくう

つきたに人のめなれてきこゆるかしうは　便都母君

氣総りおもりのかなや　河 老氣 老病也　細 不害

のおもき人へし

ゆうつきしもひたれしに　便宇治へすゝめまうし給ふや

まいれおやしおこたらせんとさくめさて

河 私語 白氏文集 耳言 万葉

歌のまへふるの人る絶えさしいさめまてわひけるけさ

すこさん給し　便都九妹のたしいふ事おやいさと語出

てうれ給とはつひしとや

比つくしおうつ給ふる院のおもしきはつよのおる事

つくひてくおもえしかれそ　細 うき舟のことや

むかし物語のようなきとのなやとさきたわせん人の許ひ

とあひしてやむさいやうなりのおもかやとせうしなうおもさて

河海抄 好く宮之桐壺で以つはつ花宮めとよのまき

給ひて光る源の人の義生まつき海みゆきなれ給

給ふ則なるかなし成へし玉藻とか謂となれ人のと盛

以さとりて之へし御おもむき年後云恵葉とて人王十六

代應神天皇九御子に雅波王子宇治のまことて

まうくさ天皇崩御し給時すれ宇治のまこに

宇治といふ所まきの雅波のまことにいま

八はつきりゆきまさの給く雅波のまことよ

為しし山のとまめよ文光九の王子八院に給ふ沙ゆ

はり給上八宮治のまこれやうにおりてひまりしんよ

おもひ八宮もしかにくすとこやと新撰し給んき

しやまつしたん院むすらく數給女帝九絶はま

給よ始さめまつきめり給の中ようの給ハ其八天

命よりとめ給ふかうしとハ見ゆる清原うしなる
ものなりしかの時の事
難波津よりくやしの浦をこぎ出て今ハ云ふ
せよめる歌ハ此あたりの海の浦
指の中をこぎ出てうしろ
宮治すて居たりわひくこゝろ
おぼゆるれとも出家ハ
身ハ世を可捨とこゝろ
こゝろ行く仁徳天皇ゝ
天皇の宮四ツ
八十七年摂津国難波
百十巻ありて前の
懐しかりけ

あそびたる高き塊ハ山陵なるを
後漢書呂大后の山陵とかりて赤眉の賊
したるまゝと河海の説ハ
わるゝ説也出家
ものなりとかの人の
うとたる人の死せ
りとさたるかもしり
のある人きやそれと
なる人とまりしん
死るうち雅ゴれ指
治のなれとく指
のなりるれ中に
つとくよりもとを
法師をゝ

天狗

なかりしハ柳もさくらもひきかへぬと　　僧都の方へ
くるしと云り
母の病のそしらすやまひとおもひあまりて念仏
なとも心みんとおもてせんとかゝとれんしきりに方経
ゐもしかとに　　河　一心不乱　阿弥陀経
そのうへの肩にかくいりしもとのこれもつもひてあらんぬしとの
心もとしきつゝもとにわつへつつに　　もおもれさまの申と僧都
宇治ゐまくハ力の修へとこと萬にしかもわさきし
とや修や
てんくうハ廣みとやうれ狐のわさむきにそてもりの森
かとおもうにやとあらんうもふれりしたもとをく
変化の物のうつさとにゝうんやまゐうしにて是こそ
と天狗とひうもうしかんしたりあさむしとハ狐の

らうんやうの人も古ゝにわさむさる出くて御所の
うしく付けり　花　天狗とかくしかゝの名も中朝にそ
天魔鬼の類りなりきとく
京りみてむりて侍ると三月ちかき程ハあまりたんへあらくろうち
物しゆひかくるを　もおもひあハ宇治ゝ多も立りか
まいりける京ふとかる人ゝ御ともハ京ちかくき一夜の
彼岸にうくるやや三月ことゝさと可讀かられもん　細　三月
まうつと僧都の母尼付る三月の末の頃も秋
まうりてとに侍らぞ四月又月六月三十日月ハあまたん
めしくうおしたるや
なおふかしのうと彼岸の景の物思ひく侍りの庵へに
あかりて侍らん　尼公ハ是ゝの御まもとやうる事は僧
都の修行や

ひとりまもりてゐ　かをとうまひとこのとし月日八郎殿
くるをまてゐしとうのひたくにはまりまをひ行俗
あり物ゐ年れ[illegible]やくとんゆうとんのかくうらいとう
るらしるをまうるをうるをかへてをりて親言の行ろ
とうろうひとてこうんいうにるをしとうんん
ひまて　尼公ひとめとゐ物ゐうしうらひのく
やうや
なくくうるをるとやうさうれうい　尼公
つうるうと俗物のうんゐ物やゐ行とと文
り公のうをたるゐや
のちぶんうれうをにうるゐうてこうん
あとはうゐううしにやうくいを出くんと物行うう
うれと　さうも代小をうるや俗郷山りゐ日

行ても習れか行あるとゐ蓋ようう行や
物のうらしたり弟れ物のりうれをあるうちうん
もう　も習れ灵乃事見八ゐ物のをにいうわを
ゐひ法師の灵とゐくく大ゐををもうろうるる
習ゐをつをたうう見たり俗郷ようのうを
て今公をうるをうんとゐるうりゐ物ゐ行をり
行や
此ゐうをゐ物のううたををのうをくを法乃ゐをゐりん
ゐをうゐ弟ゐ乃行ゐうゐをゐ物ゐうんりしうく
公をうゐをゐ法ゐをゐ物ゐうんりしうく
行ゐをと結行ゐ　ゐ物ゐの
まをにををゐやゐめをり　ゐ物と出ゐるゐ
たうや

てしにゆうゆしうまちうしめにつきてくいかうてくらくう
ありさうにゆんあうしなこしのさみとあるとせ
くらりなもしゆかしうとせうくわりてよつてし
かへ人ことしにとしれせこのおい人ともとなとうくまて心
月にゆそとあうてゆかしきんとおほえる
てしみとハてゑをえたるへし
ゆくしてわすれとはの中にてかくまてとをひらて給
あるあとあれともさにたすけ人とおひなてよし人を
薫の心やおほ中に給ふしに給ひつるとも中にまいると
のの給ふなる也　細　薫の心也浮舟也と治部卿志給へり
さらにとしにゆきにてえてはかなしめはと　薫の心也
ゆくハよ給ふ八識りし此世はあるまじきの心也
言の心ちし給ふ浅ましくかれたゆくこともゆくへもしらぬ

くるれ給ひなり給於　花　此歌の名乞ずるまいらせと
細　こよみてそしめて言の字あり　抄　おほ方中されは
大今中心を又夏れなちすうとや乞とも薫の心也
兵部のまつしきあるにかくまてみなへさらしかへ中
思ひのなしてはまるくもりてなし給へと　侍部
極称をつしおく人と薫の思ひ給心也
かくおほしあり事と　細　兵部の心也薫の慈傷と
あやしと云ふ也　宗　乞よみも侍部れ心也薫の乞
顔は般若のるにとおほしめしたる極みなる人無絶也
此世みなる人とみえしやうにおもしたるらむとおもやま
ちまてに心ちしてはと深されも　抄　よ親の出家
せしるの也
あしこに物すおほつ也しる給ひなんをゆくへさまたぬ世

乃葉りや　是より傳部乃祠也地の氣なとのおほ
ことも出来ぬなりと云るや
とかにたゞ其家の子ふてしも地し給事めいりまつり何や
まりけてかくまてたち道給ひしんふとこそ八中給へと
傳部祠思ふるまで八たゞ棄するにとの御やまま哲の若
たゞる家の雅楽頭とつとや
あす日りしとをかまるなとい大きをとゆらもゆや有らん
蒸の祠は哲は八郡孫乃人と云るんや傍まてもさして
こと本に人と卑下ぬ祠也　河生王勘云お倫八十八之
子孫　自本紀王之子孫也云く　細　蒸乃画答
一ゝみをとりてるまと　蒸の家るなとの給へり
りをとおひしまとおもと給しもとおのなかれくても云つきそ
める是給しいとえいとうくまておちあつるへこそこそ

八ちゞ給へ何りしとめつうんに何ととあくさてしうゞとまも
しりそめをするけうるんにやおとき庵しくよううつひ御隣
ぐそそそしられるるゝ八えをま御しさるとつるにあらん
蒸のかやかに有るとま哲八なまあしりの給也
罪ふの給ひて地をもまれむいとしん中をくまへとるへうつし八
立ひ給へまりねうる代　まりの居りあうたちゝ八可
死との蒸乃祠　細　出家れなりや
母なれへあんいかんしくこひろうまむしうるるとうちあん中
如うるやはをおこなりけきうほしぬ給是と
母乃るなりや　ま哲の
月比うさを給ふるは八辛まろゆやうま地さえりしなりや
御らん　小野の人くこ此門まま哲をとかくし給へき
母君なてにまてしまて八居云るとの相まとの作りゆや

うすやわらんと蓋の内の詞也　仍 吉陸の内方親王の思
わかや二代中のたひあしたに
ひ給ふてやうてまゝうひうらへしとも　蓋の詞
うすゝひはたつぐうとうひ物ゝ物いんうゝあとの
作ひく　毋元の詞れるを作て八塔思せんく
　為うんうとの蓋の詞也　仍同
ひくいと物んあれたるんとへはあれとものひうあんん
わり作人　蓋れたるんう侍都をふ習に下ふ
　　ことの詞也
かうとうと学てあのうふひもくく意侍くひ
人あるに代者のやうあるまるをいまるにうとのこ
せんとあんたひ詞ふるとの詞ふくく
　　もあのうせひ八文れやうあれと長今ふあとまん

くうわをせんとも　細　長の字二
いとかうまとうひ詞ふまとうへそとひまま
ふをあるとうんとの侍都ひんやうとうんとる
　　もあのうや
うこ物ひとうとたうはうこまにわひしをんうせ
ぬとあるとは世うんの詞ふまれうをあとわうか
らひとの侍都ひんや
まして女の清ふひうあんいとゆうはこうあうき
ひうきうもひうんへうこうあとひのちをあうんうもあ
れ　意り遠まてハ四とそうを中りく罪とうあうき
　　とあうりく
ううとありひうく　細　侍都西巻
今ふわをハさうとあり　仍とうるれたりひうんうをあり

十六

月たらずのほどに法華堂をうちたてゝ
此月ゆるされぬ也 月のうち也
いとこんりんとあげまてゝ
ひろあり それをきゝふとて
所時といそぎたくをあつまりぬ
おなじ心上臈しき様也
ものせうやうしにはとりに
ゆるされ今年の小正月の
うちにんりんのはてまさ
おとゝしうとしとしうとしを
ひ出ぬ これるんそのうちに
ひとりく物をんにひとりてゝ
そもゝゆるされたりと侍郎より

蓮の御也 ひふ美をの
くゝ形をつくりたん侍郎
行くとも

そのうちにてたくさんの中
のゝとをもをはくとの
てゝとあまるうにあるや
の御也

ものいうこと此ものうちにうもう
侍郎の西吾也 ゆるされ
郡案内をゝくゝ文をて
をうにと坊ろやうあるも
ゝうと侍郎の御

あとの方様ハくゝくゝとり

蓮の御也 ひふ美をの
郡はゝ一ゝゝ
行くとも

蓮の御也 蓮の葉ゆゝとなる
蓮の御也 この葉
侍郎より

ゝ侍郎の御也 様

袖ハ臭まて薫にかけられハもすり小野の人をやうさし給へとも
今ハたく所もうつしたちもかしう紛らはしきかへりきんすへし
物せさせ給ふきんまり給のことく侍らんとも給へえらぬを
らひ給て　細　薫也
罪こそ西面ゟ御志ある人とかめひかり給しんとおもいしを
き　薫乃詞よ我の出家し給をもきれはまことに人に
おはしも罪障とも給へさやうなの給らはしハ出家人の
あらしなとも文三出家をさまたげ人のおもい給はる
とのんや　細　詞例式の蝶きとのいまそかの給や
あてみはたくなかそちかにとこもかにあないとあやし
よつけ給なにしまりそふ思ひさし給へく侍ると
こゝもいハ薫れふかも侍の称也
三条宮乃くはよきかくたのもしきなみなかひとかけもよ

こと人あはれにおもひかへりみもしたよりて侍るへく
かうしひ侍つる程り　母女三宮乃こと也薫乃の給也
細同
とのつら住なといふすへてたく思ひまゐらせ侍るへしと
心よりなおひくなとして思ひなかりおもひおき給ふにハ
薫ハ大納言のたた大将也　弁　宮住おほしく物し露心
ときこえさせ給へと歌給へ辞退也
又えうしおほしくこおぼすそのそれひけるもくせしや
書ないの出来たらそれ薫の詞也
物はやきりなしにのいきうらえもにつきそてこそことを
侍しめ　のかれかる事まけて給ひて八罪なる
給ふハせしとや
あしそち仏のせ給へ給ふことのかけにとかきやう也まかせ

んるゆふてわやきるしとゆくしてんのうちへひ
ゆとにおとりゆるねゆとまりてていとくれさこにつを
てしとおりなはとうつきるゆふ年とてうとゆるん
ちうをに事　孫　姫文のるゆを
ゆくんわるゆうしなとふゆうとひゆちんまりた
いとゆしなわやのうへゆとを安にのきくあゆるんたうり
ちんうまくしくんやとうくんさあて　よ暮の出家
とさやくさうんとのんゆはわくとと恵乃の孫也
若ちゆくつくしくるのんたへとうゆ孫ゆ信都をに
とうるりきていとくやくしとゆしなあとちしなく孫ゆ孫
うりゆと若ゆまとて　孫　左ゆんのうゆを恵孫孫ゆとも
中やうといくしうゆとゆへうれと　れ　ゆ安を恵れるゆ
恵乃ゆんも小安と八年やとうとに可然をゆをやとと

ゆゆ孫ゆ
うとのうをうきのくしゆゆくしうをとひんあうゆんを
まとうとひゆうくひくくうゆ孫ゆこのをうとれをうを
傾都ゆとゆくゆゆ孫ゆ　信都乃ゆうゆ年くして
くをくうゆゆ恵孫ゆうくゆくゆくをうくくしき
とのんゆも
をうゆまくまゆかのゆうゆくゆんくを孫ゆんを
恵の孫小恵うゆまくゆ小安ゆ信都ゆをゆゆうて
をとゆをうゆの義也
をゆうくくくくをゆ孫ゆ　細　信都也
ゆくゆゆうゆゆうゆゆゆゆゆゆゆゆ　孫　信都ゆ恵る
ゆ孫孫
をくゆうるやうにゆゆをくまくをゆゆを有うをう

ちかくしの路此山も思ひたえ〳〵と又かりて侍るものとり
けり　信夫の細ゆも山に小舟のかり行なんどありけり
ともはせひ路をともやまがは八も路をも井手のあれ
きたもをまをゆきてハあり　弄　も路の舟ハ細にに
信夫の路やも路の舟をも細路にある也　細　浮舟
なとも露むすりせしありけるとて路ありしなきとも
ゆくとあるを　於　も路のりたるべし
けるをとにあれ見の思ひのくもりし面ちかくれる
思ひやうにはたの路に　たちあれ　河　紅葉とて
思ひやうにとしの路に　葉の細も比信のくて郷
跡にけりて思ひやうにあれやもとハてにを浅きや
於　志りくとゆきあるとの路ありけるべし
小野にハいとさびくも有りける青葉のもりもひてま

きるくるりある　青葉の山の名は有れともしも夏
山の緑陰(リヨクイン)の稿也　河宿もみちも秋路も来り
ありある秋青葉の山の色(イロ)付(ツキ)見るをも　細　名所
まれしまて夏木立あるべし　於　同
ありての蛍あるをも　弄　宇治川の蛍をも見るらん
路くるも見ても宇治の蛍はありけり見えも
若菜ゆかれなくさゆみしもの光み行くあたる　も路
のからも小野との露の名の蛍あるく宇治の蛍ありもひ出
路んするへし又宇治り蛍あるく読たる奇ハ歌あれ
ととも此あるにゆめ此りくも景を読る所ともあるへきこと
よりも武読りも路ハ秋の比宇治にかりて明る草
の三月に小野もへりつり行くなた蛍ハ見る路もしきとし
ありるとも信夫へるれとともあまりにりをもかりたるの

たく宮うちまうをて宮居みとある
やうは四段なる
きいのうち彩うに日中しる面く岩の彩ハうとさたうこうこ
とふとひくいてとはうこりたうの大の　うな山路
うとはうこうに人をたたる彩えうり乃れと彩る
つうてわるくやうるうたかうしかうう山あはさ
まの也　河　岩彩端不審　彩うとて岩のうこて
とあとうるあうわうと業也　岩乃彩端と岩
の端也彩　あの端也　岩の戸ともいふ岩り戸
あるうこうこうまうをりのも山あひる
とうとみあうはうを岩乃端と云也　夕書の岩こ
ひうこれ彩とはうう碧きをみとむ彩うう彩端
とわうとも又同風情也一統云ふ彩うう岩乃彩

こにあうてうこゆるん也　梅松をいふも彩
うあを端　うとはうこうはうこうさんう
河　二のうこを出はうこうはうく業すこに岩のたき
うこうこ岩うわるあ乃彩うるうこうひうこ
とうこ俗人の彩乃うこうはうこうこ乃あるこ
うこひ俗人うこうもうこうあやうく岩うこうこうて乃こ
あう彩うも
のうこうこうぬひうこうとと乃彩とて　うあうこを灯の
うこうを乃彩也
岩表うもうこにかうこうこうこうこうこうはうこうこ
らんはせんあうといはうはくこうこうみあうこひ彩わうこ
彩をはうこうまううこうはうこうを乃あうこ
して　ひうあうこうこ　細　尼云の云也

ひきわり　小野宮殿大臣忠平公侍郎へ引手つ
かはしける歌に大和国の国に大和の国の山の時分可然ものの
引手の歌の内にうりあやとも　河　引手　海藻也
わらは物也　細　海藻なるべし
清和天皇と申たてまつる紙いとよく紙打なとやうの
事にて大将殿とハこの女御の宮ハ此御事なるやうなり
けるとなんとも　河　飯と云ふ事也日本紀
主とつかさ　サキミツイヒトヨリ　法社奉ると上郷飯とも
時しもあれ清き世と作もの也
いとこの世とくくの中ひのよたりや　細　うなる舟なんも
うちつきん清隆多ニ多ニ多ニ多ニ多ニ
也そうも
まてもんさもやわらん　れしも君ハ人なる所ものや宮人也
時しもあれ山ちかふ和歌を詠しに
ちしの詠し時隆卿の家にてさくやこの花とかの
詠ものも　菖蒲の宮殿人々
いとをかしうもしもんのうちもうちもうちもうと
あやめの日のうちかけまくもんもしれもとのかくやひ三
まもとをとをもあすんさとをとをとをれハ行隆
行ひ思ひまさりてしてうなる舟の美やのしもて
とひ詠ものも
いとく物もいとてやうと　ものの物也
ようきたうふんのこちん此ものをとをるたりの
うるかのとれいこうるやうて春ちんとなりのれと
小野の内をとを地ちの清きと　細　これさ海也
人ものなくてひんなけまを春ちんの詠ものく又ものの

忠とりしにそひてしたてて路に　薫乃心あはれ小君
をも具して小野へと思ひしかれと法師の人めをもはゝかり
またくらきに行てその日態と小君をいたしたてく
路とも也
如何まして思はせん人のとゝしけしくしらるを二三人ちらうか
くうとうるもりしを使ハさつかけし随身を人行つ
宇治乃使ヒたりし随身也
人さきをまんなきせ行くあたうきせにしつちうにゐ
のうかき思川やや今ハ世にない人をともひたてありしを
いとさうしうにてそ思ひ路にあされ　薫小君をよひ
まいらせて思出れとを同路にや也おさなき人をとも
とゝにおとこと云り又思出ハあいなきてとも思ふ
くゆかり物語の中に思はし　細　浮舟乃事也

あはれなれと女とハ妹と云也
づうれ人あたりせ也とそめ給とどこそよりそめよく
思はすらしくしてに付る中々おとろかさせるまてうん行まよ
ちるまうし花人もちるとちまん
あはえの行さきも小君ハ小野にちるゆきとれ参や　薫乃随心し路人
そのわやの清えひのいと思しさにしそかくさも見れ
とゆうくをにいとしくろろちう行とおさなき也哉をも
ちうつりハ思川乃ゐてし浮舟の人ちをとも母の為にし
とまひしみなくうつしにち給ゆけりとも也もすそいと
うかひし思ふうたにかくの路人をうう給ひしさ母をも深
わか乃かき　母君のいとおしさにとの薫乃詞也
まうちうきつひにおとをわしらにせすしみうさと
花　おもゝとハ嘆也いしめるに言也浮のまき一うりしにおと

とあるこうにてこうへあるも　年代同之

こうにまさまさはとめて信都れはまとうへたる
度の時つうひみくみ光やまうて行へしてのみ
給つうしにおちをみちく　信都ちう次の月八言の朝
う尼云のうへたる度まうふ光八清彼あて来給
ぬとうへして易給とも
うあうてはくし給くまんと姫光ゆ行へみうう
ゆまさ行へいさとも給はれふあをすしうふ
らふあうさ行つう　信都のうへも光ふあひ
て膳行うしはるうに行へうと給へとも
うれハ行まそやあう光給ふあうあうこうへて
ううくはんをあう給へもあてうちあうめて
尼云はのうへうと行也

御のまうのあるうやうくうにあうと姫
う給へうひはくうにうへあうあう給へ所
う　はのうへうくやうに御をうくゆう
御ゆくも
給の給ををゆうを給はるるゆをうくく
うう見ううのうとうわう　尼云乃初也
ううさんの給へうも
あううくうちまうひううへ　尼云のすも
たくうを思ひある同みうも
みううをうへみうをうへうくうう光うへうへある
やうひは光乃あやうれと　小光信給乃へまて光也
光をハ給をうをううを給清せうをこうへうとてこ
あさとうをを乃光也

尼云のへも信都ちう氏

長袖飄纔口垂 文選也
勝之秋興賦 右源道於篇

文とハいひ入あるへきやうもなけれとも老てそ侍るの
るゝ事にて可有文なれとの心也
てとこそ書に書すゝめ給へるわらハの乞ひしる給へるそ
さるる事をおほしてさゝしく給　河 巻是 白氏文集
きこえさす心そたゝまことくこれのまことに清いみて
河 藁（ワラワ）座（ザ）　細 糸（エニ）座（ザ）也
あやしきハ夜のしきわつらふてハ僧都ハの給しつ
とハくむ尼君そのことくあるとし給ふ　少君の詞也とや
うたへなくあやしくおもふらん給ひしと僧都のの
給ひしとも　細 童（ワラハ）の詞也
あとさふとのまゝくうかれて入給ふの姫君のとゝまに出給ふ
とそ　御心かなと僧都あるとりやうもにの給へる
とりなき給ふらん也

なりき給へり　細 僧都の詞也
わらハにもかくいひやうもなし　よは御いの心也
いとおもしろくおほしてもてなしくをかしくまいらせて見
うれしとかしこくおそれはきみのいま一きさしの給
御心のあまるを　私 地のまゝにおもへりし　宗 尼君の心也
いとうるさゝてとおもふをいふ僧都はいよいよかしこく尼君
尼君のよは給ふの心のまゝにとゝまりとて宿給ひとなりけり
私 尼君をもとなりと也
あさこえに大将殿の御もとへ行て出有侍ることも給へり
こうめかきしゆるうかくはをもとかくうつりぬ給へるよし
大将あかなき出ることそ也給ふへくおやしきもとの心とある
のもかゝに出家し給ふ事　僧都よりこの文ありとも
文を晩日河の文なるかと朝とくる御返りのやうなれ

と申日ハ日くもあるとて其の色ゑ染ゆるなり
晦日乃又とをつまりしゆつや　細　又の初　弄　細又同
くをうてハ仏のせあるとつへなることをうんうあるうり
おとろあるなり　　ものを過をはもをたもくハ
ゑひ弱まりさとの又初や
ふくをでんもとの山琴うあやまち行うて　弄　せん
うるるしうやあとうんや
わへしうのはをとをあうくゆるく行て一日の出あ乃ゆく
ゆくハをうとかたはなれも　河心地観陀羅尼曰善男
子及善女人発阿耨多羅三藐三菩提心十日十夜出
家修道二百万劫不堕悪趣常生善處受勝妙
樂遇善知識永不退薄得値諸佛受菩提記坐金
剛座成正覚道云云

ゆをあのまを弱へをうん　一日出あの功徳さへを
うををなるゆるれを行をのをくゆひ行へを
乃又言や
ををくゆをみをうくをひくゆゆうんうりくこ乃ゆ
ゑゆるくを弱てんとうをたうをうんくをあるもを出ひを
らゆ弱へまを　　をくくを
ゑくすゆをや　　毎ゆハ
をくんをゆをえを　　ゆ碧ハよくゆをくゆ行をゆを尾ゑをを
ハ行ををゑふゆとを仏ゆ　細　をうるをハるれゆを
をををうるんををいをゆうう　小ゑを
こを乃ゑハ雑みをあうをうんををいをゆうう　小ゑを
ハををゆを乃ゑををちゆををゆをめて四行ゆ
今をんくをあゆうちにをくをてをを弱ふををゆくまて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

物もいとをしくもあるかな　　ものの初也　花　うき舟乃尼云

よしの殆うんかるる　　殆行初也

あさましうもとうんかうちうちはめうつくしる所事とうん

殆うくうんとさてうつ心とう殆あまり井ちと云

うんものもあるぬさ面りちりにやあるんかに

もくくもものあるくるのるとあるうちうにえうひ

出ぬり　　ものの初也宮殆すて本のかもと有しの

有様をこめてめつくきるのうそみ殆くんとも

宮殆みて殆行殆うんをまを殆とうつくうろ

も魂もうをうるにやうきもちくうるすおは

えぬかうや

紀のうきやうあるうしくのうろ殆をめうしたうにうん

月うかうとれたとすやとのうんとひそくあくるす

あるのちまくうろ橋とうちううきあるうとひつうられと

ものの初也大尼の殆也おまおかにまくやうる

しるとかものの殆也

ちうにちうくしをを殆しぬり　　ものいすく元

されとも尼云れ陽んし殆とて殆殆へて一面る

元ぬうしの殆也

たくひうとあり殆ひしくんのひうそあとあるうあくも

ひうをめるくを　　ひうとい　殆　母の事

まくや元にあうくんとうをまうとうんのをまる

をうるくをおるうくに殆るにそひんをまをびうくそう

うやうちいさくてうくうちするにいとをひうるまれ

と　　芝も無れるものとの給つ
今はこゝにゝ侍へ　みとあるもとあるもとを　まゝゝれくやゝちんとん
ゝひ侍る　　ゝ歌人　細　ふ天也
　　あるとハ者ゝ給く　　てゝ文字をみゝるへゝ
ゝのへ　　せゝ給ゝ給ゝ給ゝそれひとゝにちんたいめん
せゝ給ゝゝゝ侍る　　無のゝ也　　それゝゝるとハ給
　　つあひまゝゝたゝゝゝゝのゝ給也
こゝ侍部れの給ゝゝへ　ちゝと無ゝ給ゝ　　ゝ　　ゝ
ゝくゝそゝひ侍ゝゝまゝゝくゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
給ゝてゝゝてゝゝし給へゝの給へゝ　　　　　　　　
　　第　　ゝ給の詞也　　　　　　　　　　　　　　
いゝゝゝゝゝゝ部侍給のゝんいゝ給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ給し給へゝ　　　　　　　　　　　　　

まゝてゝゝゝゝの給ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
侍ゝゝゝゝゝ　　　　　　　　　　　　　　　　　　
ゝゝゝゝのゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　無ゝ侍部のゝ給れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝゝ侍ゝの詞也
　　なのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝゝゝゝゝ　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

小天も[illegible]

細 [illegible]

又[illegible]

[illegible]

[illegible]

小天風[illegible]

[illegible]

[illegible]

くもてあるき殆ひすまはれぬるとうやまひ侍りしうとく
世間一ありにそれて　　小夫人を養ひ給ふ陽成院
殆との四ヒ世間くしく八あるりうをたんてや
学問つきるもを侍るもそれ清文殊人侍りて
きまれとてそへはうつてきんとつへも　　恵
文のことをそう　　光　寄の初ヒ
いとをとそうも　　尼公あとけ初ヒ小夫乃寸分の
乃程とヒ　　知ヒ
行いとうくうてあ世ヒ　　尼乃ものを初の
清心あてそ学ふてて　　知ヒ
乞性のをヒにをしをもわて　　尼公あとくの学
を小夫ちくをしをあるヒ

あ世あをはてあ殆ひそ　　ひとれ
てや小夫よちつき殆ヒ乃侍ヒ
殆ヒ世代ちを小夫ちつ乃尼乃ヒ
とへうハ世あをちすあをたをにをとてあつ
世ちうくを殆りて来りをん　　小夫ちつヒ
あ心夫をとをちるとたうんヒをそをヒをりて
とハ本丁ちをとを世をあるりうあをたうを
心りう
とくうヒをくしをを学をとをひく　　小夫ちつとの
清ちをとくを殆りれとヒにくふありてをくふ乃
陽心しを殆とてうやうをるヒ
い世くあを夫ちを文を学をを尼ををうで　　恵
ちをの文をとを学に尼ををう殆ヒ

有しあるこれはいかくこそ乃者なると　美の心を
ものなるべしや　文の白ひあまりとと
きいのようりなまて去きたり
さてしまたとにうりたるや御とゝ常よりやうれ
たるや
御のこれ乃くきいの初めてのさしさくいとあるかく
ゆくしとこそ　居ることをしめきおれんことさ
しるくゝ初めてきそうんなまきそくとそくいあり
くこそうんとや　細　美の地や
ちくこそうんうくく　大和殿文こそや
ちくくはきゝ初めるはんとも伊部ようこひゆるし安
きくく　光を文こそやの初の文くに罪ゆるれんれ
ときを出あり　行とゆの行くいこそ罪をとも伊部ようい

ゆるしたくとこの行ゆるとの俗や　細　美の文乃知や
今是つてあさまし　細　みつくりたきこそ
こそうくうとそこにといれうあくんの　細　美の字四ッ
部ようこもゆるしおりゆんまして人ゆいゆくみとうき
を乃行きた
ゆいゆくこそやくあひたきこそやと思心をもとう
さとや　細　ひつあさんもとうまして人いうこそうんとや
法の師と為ようこそきるくみくあるこまきまこそ外
美乃　ゆを伊部を法乃師と為あるこそのたるに
まして乃きと行りこそ意路よ者こそふとの心や下
あそたくとの文を心よりまして乃やをんなへし
細　法乃師とのこそ伊部とこたのゆ乃をまりかくゆひ
けちうるゆよあのこたるとやあるとの字めこと

くはのしろきんも
こうんさきやこまつ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]ん[illegible]ひ[illegible]て尼公はや
[illegible]ふ[illegible]ま[illegible]の[illegible]ぬ[illegible]や
いとはんこ[illegible]おぼ[illegible]れ　　於尼公の御
わまりこ[illegible]ぬ[illegible]ん[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
あとふひさ[illegible]こも　　あ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
心ちも[illegible]ひさやう[illegible]ん[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
而なをおとの義やしの[illegible]れ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
ん深さんとて[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
さあとゆん[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
のうまんさるれや　　河海の[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]
あるしそ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]

尼公のふ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]

於 唯今此うの
ほうつきてあつ　まきもくれとおさるも
心ちはそこもうせるく　小弓とまてをたしらも
あもてあるかしらて　ゆさるかしかの小弓をわ
ちくへとるくすもたる物ひむうかぬるすとうり
わさとまれさを弱つるもるしになる事とうかやのくさ
せんともくんたくひとくとの弱まるようしあとく
をくあふるとかひくかくんと　小弓の須也たね
屋ちまを結宴まてまう弱ふくくにかりて
八行とやまくんくくもせめて一言とは
とをの弱をもをもそきみく満をせんとの事也
小弓の須京すりをくくくるる
うくくれとも物をの弱ひくうひをくあ

居ヒ小弓の口うりまふ弓あひく一言をうをも
をくくくあかりくあのきの弱をもを居ヒ答をしかるも
をくくくあかりくあのきの弱をもををを弱つるる白あ
居ヒ乃の須小弓場りてくくあとのあつれをを弱
とあつまくに太刀屋うりを弱つるも
もくうをあくに屋をくらあ須ふをかめるを　居ヒの須也
あつをあ八雲弁を影に白る様乃言ふやつて屋面るる邪
ひ引弓ヒ白をうをあくうを京をふ雲をとのるもうを
ひをひうり而白須すや面流の引弓をうわくて
細引弓赤動也ヒを横川八雲乃八雲をの山をとい
へをを此ひうりをさまてあるくくもるる白あ
風ををくくくをもれるくくひ弱へとふを
をうをくくも

山風とも云ふ　ある人の和歌に山がくしとも云ふ
なり　ある和歌に山がくしとも山風とも云ふ
是或説に山がくしとも云ふ　細　山がくしとも
云ふ一説ありしかるべし　於　郷　とは郷
あひされば事なり　ろも和歌
ものをもとめんとあやしくるへそれもうるる
んとて　小男うんもゆくんとするも
人をもとめゆくさまにて　とも思ふ　ある
ものうくうちわくてんゆくなりうる事なり
小男うも碁にあらぬ事　とうちおしくこひる
ら事よりたる事なり　事うたる
いかりとなりたるにうくしてうるる
まこしすきまくゆくあるとおもてとなくなりて

小男うのゆくんとなりて　碁　碁也
人乃ひくしもくあるらやあるんとて　ひ碁とさて
一人の小男ありうくしてひ碁るみやとう碁の行也
碁ほんのうちひるくぬるるるるるるるる
ひみとて年行　碁の宮居ひ碁とものわ
是碁ほんとものなる行るやうにとみんのみ碁る
すんとくみやとうひめくらる行みとも　聟同之
居碁　聟　聟碁ひ碁ひとおとも
南碁　南碁みとしてひくくあるるるる碁ひ碁
ありは心もう、花ひとくるるるるるるんと
うくもんるるんりひとやるるるるやか
ぬみやとうるんるひるうるるるるるるるる
るるるりうるるるとうる　細　花る流いくる

くしまたるにあるともや菖の宮居りくしまた
ゆるやうにくとさたるともや
かはるる　例の式アラフのかみ君くるやうに
ちり一部乃うの生れまきふくと治このんつりひとり
さかをもとかにうへめあれとも云ふ花むかをを或
説よりは君れたのゆくうをとびまれまるはまきを
ものあり空ちり位とをとハ云徒(ナキセウコ)抑(ヨク)ものへ
細 紫式アラ一部多分をくるやうをうをもしやて
うメやるふやの面うよりうてしらかはやうれる
あるとうるんやうにして行末をくしるるをて
ぬうメ乃猿(ミヒ)恵源(ミメウ)微妙(ヒメウ)の紙面(カタ)と見たり

かるれつかとい小人やさしさはうちの
うまたの物物ともれ押(ヒ)なるとおろ
をさ物と省略をまをまを書者者為為
ほうを徒ものうい小ほうるるをれ
小山とうしまを小一京のと号をを
ほ物一部あを連い清物ものを
をうるもへ物しかををを貴と
小ふる物を百ろあまねくしを
たるりをいまを物をるへいなもをもを

見給ひ出し給ひしくもたる海人
の子どもよりもおもしろみあるものなれ
いくさまさしたる事をもえしるまじきあや
まるをおぼしく侍る方くのみおもむき
からかしこまりあはせをおもひ
おもしろ侍るたる人をもおぼ
らへしむ給さいへども東光院殿
のおぼしめしのきのゆえの
ものとけたまはるにおぼ

の事を書写して御ものがたり
をすすめられいわさしく見給ひ
ゆるまるる御ものさまの事を
ものとおもひ給ふ志とおもな
ばとい文をまるまの屋ガワ侍るを
さ云ゝ之本此侍るいのり念ない
ものたらさまるおさもこゝを過ましたなけ
れいの文をまる島ものもの書目の
ものさいかるくまるまるまんへらさんと文多

のあのかいぬの人をあまりたゝ
いぬをもさきのいをつくしてる
をたまへる事ありがたく
見るもうれしく
の四向をまいらせ
依て家をあるし侍る

寄題元年十二月吉日

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan